日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

隅の首石
――マルコ伝第11章27節～12章12節――

１９６５年３月21日
小池辰雄

何の権威か　平伏しと権威　御霊の権威　霊を具体的に受ける　聖名の権威　回心また回心
葡萄園　隅の首石　棄石　躓きの石

【マルコ11・27～12・12】

27かれら又エルサレムに到る。イエス宮の内を歩み給うとき、祭司長・学者・長老たち御許に来りて、28『何の権威をもて此等の事をなすか、誰が此等の事を為すべき権威を授けしか』と言う。29イエス言い給う『われ一言、なんじらに問わん、答えよ、然らば我も何の権威をもて、此等の事を為すかを告げん。30ヨハネのバプテスマは、天よりか、人よりか、我に答えよ』31彼ら互に論じて言う『もし天よりと言わば「何故かれを信ぜざりし」と言わん。32然れど人よりと言わんか……』彼ら群衆を恐れたり、人みなヨハネを実に預言者と認めたればなり。33遂にイエスに答えて『知らず』と言う。イエス言い給う『われも何の権威をもて此等の事を為すか、汝らに告げじ』

1イエス譬をもて彼らに語り出で給う『ある人、葡萄園を造り、籬を環らし、酒槽の穴を掘り、櫓をたて、農夫どもに貸して、遠く旅立せり。2時いたりて農夫より葡萄園の所得を受取らんとて、僕をその許に遣ししに、3彼ら之を執えて打ちたたき、空手にて帰らしめたり。4又ほかの僕を遣ししに、その首に傷つけ、かつ辱しめたり。5また他の者を遣ししに、之を殺したり。又ほかの多くの僕をも、或は打ち或は殺したり。6なお一人あり、即ち其の愛しむ子なり「わが子は敬うならん」と言いて、最後に之を遣ししに、7かの農夫ども互いに言う「これは世嗣なり、いざ之を殺さん、然らばその嗣業は、我らのものとなるべし」8乃ち執えて之を殺し、葡萄園の外に投げ棄てたり。9然らば葡萄園の主、なにを為さんか、来りて農夫どもを亡ぼし、葡萄園を他の者どもに与うべし。10汝ら聖書に「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる。11これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり」とある句をすら読まぬか』12ここに彼等イエスを執えんと思いたれど、群衆を恐れたり、この譬の己らを指して言い給えるを悟りしに因る。遂にイエス

を離れて去り往けり。

●何の権威か

マルコ伝11章27～33節は、マタイ伝21章23～27節、ルカ伝20章1～8節が並行記事です。

27かれら又エルサレムに到る。イエス宮の内を歩み給うとき、祭司長・学者・長老たち御許に来りて、28『何の権威をもて此等(これら)の事をなすか、誰が此等の事を為(な)すべき権威を授けしか』と言う。

例によって、伝統的な権威をもっているところの祭司、また教法学者、長老たちです。これは宗教の世界では、よくつきものですね。歴史が出てくると、そこに伝統的、制度的な権威というものを持つ人たちがあるわけです。ローマンカトリックでは、法王がそういった絶対権をもって、法王無謬(むびゅう)というようなことになっている。それは会議で決められてしまっているような始末です。そういったオールマイティというものを持って、彼らは自認しているようなのが、この「祭司長、学者、長老」という者たちです。だから、ずぶの素人のイエスが現れてきて、宮潔めのことで、宮でもってひっくり返してしまったら、

「何の権威をもってそんなことをするか」

というわけで、責め寄ってきたわけです。

29イエス言い給う『われ一言(ひとこと)、なんじらに問わん、答えよ、

これがイエスの鮮やかな受け太刀です。向こうは勢いこんで、「お面！」と来たわけだが、どっこいこっちは、もうひとつ達人でありまして、

然らば我も何の権威をもて、此等の事を為(な)すかを告げん。30ヨハネのバプテスマは、天よりか、人よりか、我に答えよ』

「洗礼のヨハネのバプテスマは、神さまから来ているのか、人の人間的な取決めによった権威か」と。

31彼ら互に論じて言う『もし天よりと言わば「何故かれを信ぜざりし」と言わん。

神からきているものは信じなくてはならない。

32然れど人よりと言わんか……』彼ら群衆を恐れたり、人みなヨハネを実に預言者と認めたればなり。

即ち、群衆は預言者としてこれを認めていたから、そういうことを言うと、今度は群衆に逆に責められる。答えようがなくなる。さすがに、イエスの知恵は彼ら以上の天的な知恵です。

33遂にイエスに答えて『知らず』と言う。

「知らない」と言う。答えられないわけです。

イエス言い給う『われも何の権威をもて此等の事を為すか、汝らに告げじ』

イエスは、言うまでもなく、神さまというオールマイティ、絶対権を持ちたもうところの、この神から権威をいただいていた。

●平伏しと権威

神さまから――私たちはキリストからですが――或る権威をいただくためには、もう絶対に平伏（ひれふ）さなければダメです。平伏しのない魂は本当の権威をいただけない。そうでない権威で威張るのは、人間的な威張り腐った権威でありまして、そんなものはどこかで必ず限界が来てしまうし、また倒れてしまう。英雄の末路を見ても、その通りです。

権勢をほしいままにする、いわゆる政治家というようなもの、またそういった武力をもって立っているような人たち。地上の権威というものは、これがみな崩れていくことは、歴史が、事実が証明しているわけです。もちろん、政治家といえども軍人といえども、本当に平伏しの魂ならば、それは立派な政治ができるし、立派な軍を動かすことができましょうけれども。

教育者でも同じことです。片一方に偽善、ごまかしというものが見える。私が申し上げている「福音と文化」の関係というものは次元が違うんです。決して、直線的にはそこで利用するようなものではない。次元が違い方向が違う。しかしながら、連なっている。

どの文化面に対しても、福音というものはそういう角度において、そういった質をもって力となるものです。芸術の方でも、なにもマリアを描くことが宗教的であるのではない。ひとつの塵埃（ちりほこり）を描いても、そこに本当の宗教が表れているかどうか。こういったような質（たち）です。

権威というのは、本当に神の前に平伏すところに出てくる。イエス・キリストほど平伏しの魂はなかったわけです。私たちは、

「私は無教会です」

「私はカトリックです」

「私は幕屋です」

と、自分を何者かと思っていたら、それはダメです。本当の平伏しのところにこそ――ゼロ、極点――そこにはじめて神のオールマイティ、全能的な権威、全さがくるわけです。全的なものがそこに臨んでくる。そうなったら、

「自分の器がどうであるこうである」

と、そんなことは問題ではない。実に、

「この土の器」

とパウロも自分のことを言いました。

「この土の器に盛られているこの宝をいかんせん」

とパウロも言いました。ガラクタの破れ衣の中に入っているところの、入れられたところの、

その権威なるもの、これをいただかなかったら、もうそれは信仰生活とか何とか言ったって、つまらんです。

●御霊の権威

私は相当、乱暴なことを言ったり、

「集会は毎回、解散だ」

なんて言ってみたり、あなた方の気持にときには逆らうようなことを言ってみたりするかも知れません。けれども、それは、あなた方が本当の権威で動くところのクリスチャンであられたい、ただその一念です。

そういうわけで、キリストは相手が何人いようと、もちろん、びくともしない。もう全部これは逆に担いあげてしまう。

私が無教会の出身で、全無教会が向こう側にまわってしまっているから、つい、そういった戦闘的なものが出てきますけれども。力んでいるのでも何でもない。正直、このイエス・キリストの御霊の権威で一切の枠がはずれ一切の色がぬけてしまった。キリストの光の無色透明の驚くべき、一切の色彩をもっているところの無色の世界、白光の世界に入って、とにかくその恩寵の中にありますので、私は本当にありがたいわけです。

それは、私がキリストの十字架の前に本当にぶっつぶれさせられた。

「十字架、十字架」

とキリスト教では言っているけれども、本当に十字架かと。それならば、復活のキリストの御霊は、イエスは決して空き巣にしておかない。

「もし、空き巣にしておけば、七つの悪鬼が帰ってきて、今までよりかなお悪くなるぞ」

と、キリストは言ってらっしゃるような始末です。

聖霊をいただかなくて、何の権威かと。権威の所在はこの聖霊にある。キリストの言葉は聖霊によって語られている言葉ですから、キリストの言葉をそのような霊言として受けとらないで、どうして、この聖書が読めるか。「神さま」と言っても、「キリスト」と言っても、三人称的にいくら読んだって、それはどうにもならん。どこまでも、

「我は汝を」

「汝は我を」

という関係です。

●霊を具体的に受ける

昨日は松岡君の結婚式でした。私は、どなたの結婚式に臨みましても、ただ結婚式をしているのではない。そこに集まってくるいろんな人たちに伝道している。披露宴でも、言

うことはそういう角度です。何とかして、そういうチャンスを捕まえても、この福音を伝えたい。私の隣に坐っていた人が私に聞くから、私はそこで披露宴の御馳走を食べている最中にその人に伝道してしまった。私たちは、本当にこの喜びを伝えないではいられないわけです。

創世記の中でアダムがイブに向かって、

「**汝はわが骨の骨、わが肉の肉**」

と言った。あれは一番古い歌で、素晴らしい歌です。「わが骨の骨、わが肉の肉」と。夫婦の関係はそうかも知れない。けれども、私たちのキリストとの関係が正に、「汝はわが骨の骨、肉の肉」ということです。

「**わが肉をくらえ、わが血を飲め**」

と、キリストがおっしゃった。そのように

「わが血の血、わが肉の肉、わが骨の骨」

とは、霊的な骨であり、霊的な血であり、霊的な肉です。そして、キリストは、

「**わが言は霊である。肉は益するところなし**」

と言われた。最後の晩餐でパンを裂いて、

「**これは私の肉だ**」

葡萄酒を飲んで、

「**これは私の血だ**」

と言うときに、キリストは仕方がなしに――そこにあるパンと葡萄酒は、これはひとつの言葉ならざる言葉なんです。なにも魔術を言っているのではない。言葉ならざる言葉――

「これを具体的に受けろ」

と。

「私の霊を具体的に受けよ」

と言うときに、具体的な葡萄酒とパンでもって表されたわけです。

具体的な花やなにかを見て驚く。そこに神の言を見る。言葉を見るんですよ。そういう体験を本当に身につけないと、身につかないものは何もならんです、すべて。どうか、皆さんがいよいよ、身につけて、そして、なるほど、私たちは本当に神の前に平伏し、キリストの前に平伏して、十字架の前に本当に平伏したときに、

「**もはや、私が生きているのではない。キリストが私の中に生きている**」

と、パウロと一緒に言うことができて、本当に「アーメン」となったならば、もうそこの世界は本当の権威がきている世界です。

この使徒的な信仰の質、この次元からズレたら、もう福音ではないですよ。どうか、皆さん、今のキリスト教界がどんなに偉そうにやっていましても、びくともせずに進んでいただきたい。それだけの、あのギデオンのところで申しあげたところの本当の「精鋭三百」となる。

この福音を得たら、もう脱落できないんです、これを本当に身につけたら。

「小池先生は信仰を捨てたって、私は行きます」

ということにならなければダメなんです。

●聖名の権威

イエス・キリストがこの権威をもって――これは言ったってしょうがない――

「私はこういう権威だ」

と、もしキリストが説明されたって、説明で相手はどうにもならん。サタンというのは霊的なやつだから、イエスが分かっている。サタンの方が偉いよ。祭司長・学者・長老なんていうやつよりか、悪鬼の方が分かっている。悪鬼は真先にイエスを見て、

「神の子だ」

と言った。霊的な次元のやつは、悪いけれども、とにかく霊的な次元にいるものだから、分かるんです。

こないだも、狐の、お稲荷さんの霊に憑(つ)かれてしまっている人が――あの方がなにも悪いのではない。あの方は非常に祈りの深い方で――あれは福音の世界に入ったら素晴らしいことになる。祈りが深いだけ、サタンが狙って、これを虜(とりこ)にしてしまったわけだ。それだから、動きがとれなくなる。聖霊の力で私が按手したら、倒れてしまって、苦しんだでしょ。苦しんでいるのを見ていると、狐の霊が憑(つ)いているのが見えるわけです。それから、私がその霊に対して、

「聖名によっていでよ！」

と言って、窓を開けて出したわけです。

福音書と同じですよね。キリストはレギオンの悪霊どもを、そこらへ出すと他の人についたら大変だから、それで豚の中に入れた。そして、豚はみんな崖から落ちて死んで、悪鬼を滅ぼした。豚の飼い主どもは、

「ひどいことをしやがる」

なんて言ったけれども、しかし、人間にとっついたら大変ですから。そういった消息は、普通の単なる心理的なことではない。パウロも、

「諸々の霊があるが、それらを信ずるな。キリストを神の子と告白するのが本当の神の霊である」

と言っている通りです。

イエス・キリストがそのような権威であった。

「霊的」

ということは、いわゆる霊的現象をただ言っているのではない。霊的とは――イエス・キリストの前に本当の平伏しとなって、聖名を全存在をもって呼んでごらんなさい――その

世界は本当の正しい霊の世界です。キリストの白光に貫かれる。

私たちがキリストの光に貫かれたら、一切を照破し、認識することができる。また、暗きを明るくしていくことができるという、ありがたいことです。それはこの世の一切の権威よりも上ですから。聖霊は恐れを知らない霊です。そして、本当に深い愛の霊です。一切を包摂します。みんなこれは包括してしまう。

私たちは、聖書が本当に読めるためには、この聖霊の権威をいただけば、そして、いつも真理の霊の前に平伏しの魂であるならば、これはもう、ズンズン入ってきます。

●回心また回心

これは、マタイ伝だけに書いてあるが、マタイ伝21章28～32節をちょっと読みます。

「28**なんじら如何に思うか。或人ふたりの子ありしが、その兄にゆきて言う「子よ、今日、葡萄園に往きて働け」29答えて「主よ、我ゆかん」と言いて終に往かず。30また弟にゆきて同じように言いしに、答えて「往かじ」と言いたれど、後くいて往きたり。31この二人のうちいずれか父の意を為しし』彼らいう『後の者なり』イエス言い給う『まことに汝らに告ぐ、取税人と遊女とは汝らに先だちて神の国に入るなり。32それヨハネ義の道をもて来りしに、汝らは彼を信ぜず、取税人と遊女とは信じたり。然るに汝らは之を見し後もなお悔改めずして信ぜざりき。**」（マタイ21・28～32）

譬話を話しながら、もう事実、相手に向かってキリストは切りかかっているわけです。「行く」と言って行かない。「行かない」と言ったけれども、悔改めて行ったという。

宣伝的な人間は前の方ですね。後の方は不言実行の方で、少し渋い方です。人間はこういう渋い方がいいわけです。むしろ、始めは

「だめだ」

なんて言って、しかし、それから実行した。

「イエス言い給う『まことに汝らに告ぐ、取税人と遊女とは汝らに先だちて神の国に入るなり。」

と。そういった魂が単純に、神の前に、キリストの前に平伏して展開していく。片一方は、己を義としている者は悔改めない。転向のできない者はみな、己を義としているから、自己義認をしているから、これが転向できない。

人間の罪の一番大きな罪は自己義認です。己を義とする。パウロがその最たるもので、

「我は罪びとの首なり」

と言った。しかし、彼は、

「自分は罪びとの首である。この己の義を塵芥の如く思う」

と言って、投げ捨てたところに、彼の魂の本当の悔改めがあったわけです。それもキリス

トにぶつかるまで分からない。復活のキリストにぶっ倒されて、初めて目が覚めた。

現行犯の遊女を捕まえて、キリストのところへ連れてきた話がヨハネ伝8章に出てますが、あれもその通りです。他の者たちはみんな己を義としたが、

「それでは、石をもって打てる者は打ってみよ」

と言われたら、一人、二人、三人と、みないなくなってしまった。

神さまの前に、イエス・キリストのあの山上の垂訓に及第する人はひとりもいない。山上の垂訓の前に本当に平伏して、

「どうにもなりません」

と言って、キリストに、十字架というキリストの門を通してしがみつけば、今度は、どうにもならない世界がみな、福音的な実存の世界に切り替えられて、躓いても転んでも滑っても必ず前進していくところの人になる。

どうか、そういう意味において、いつも我々は、悔改めまた悔改め、回心また回心、キリストに新生また新生して進んで行きます。これが即ち、始めは

「行かない」

と言ったけれども、後から本当に実をもって行くことをなすことになるわけです。

●葡萄園

それから、今日の葡萄園の話のところに来るわけです。「隅の首石」と題しました。マルコ伝12章1節から、

1イエス譬をもて彼らに語り出で給う『ある人、葡萄園を造り、籬を環らし、酒槽の穴を掘り、櫓をたて、農夫どもに貸して、遠く旅立せり。

マタイ伝は21章33節から46節、ルカ伝は20章9節から19節が並行記事です。葡萄園のことはイザヤ書5章に、

「**1われわが愛する者のために歌をつくり、我があいするものの葡萄園のうたをうたわん。わが愛するものは土肥えたる山にひとつの葡萄園をもてり。2彼その園をすきかえし、石をのぞきて嘉ぶどうをうえ、そのなかに望楼をたて酒槽をほりて嘉葡萄のむすぶを望みまてり。然るに結びたるものは野葡萄なりき。**」（イザヤ5・1～2）

「望楼」は、悪党が来たり、あるいは悪い動物が来て、それを食べたりするようなことがあるから、その番をするためです。ところが、結んだものは野葡萄であった。イスラエルの民を葡萄園によく例えて言うわけです。このイスラエルの民は本当の実を結ばない。本当の信仰の実を結ばないで、あだ実を結んでしまったから、そこで「野葡萄」だと、こういう言い方をしている。

ここのマルコ伝のところは別な譬になっている。

2時いたりて農夫より葡萄園の所得を受取らんとて、僕をその許に遣ししに、3彼ら之を執えて打ちたたき、空手にて帰らしめたり。4又ほかの僕を遣ししに、その首に傷つけ、かつ辱しめたり。5また他の者を遣ししに、之を殺したり。又ほかの多くの僕をも、或は打ち或は殺したり。6なお一人あり、即ち其の愛しむ子なり「わが子は敬うならん」と言いて、最後に之を遣ししに、7かの農夫ども互いに言う「これは世嗣なり、いざ之を殺さん、然らばその嗣業は、我らのものとなるべし」8乃ち執えて之を殺し、葡萄園の外に投げ棄てたり。

もう、お読みになれば、すぐお分かりの通り、イスラエルに例えて言っておられるわけです。そして、預言者たちをみんな殺してしまった。そして、最後に、この愛しむ子、即ち

「汝はわが愛しむ子、我なんじを悦ぶ」

という、この「愛しむ子」とはもちろんイエス・キリスト自身です。これを捕まえて、

「これは神の国の世嗣だから、殺してしまえ」

「本当のメシヤではない」

というようなわけです。それで、

「葡萄園の外に投げ棄てた」

即ち、エルサレム城門外のゴルゴタの丘で十字架に架けられることを、イエスは暗にほのめかしておられる。

然らば葡萄園の主、なにを為さんか、来りて農夫どもを亡ぼし、葡萄園を他の者どもに与うべし。

そうしたらば、葡萄園の主、即ち神さまは、イスラエルを亡ぼしてしまうぞと。これはエルサレムがもう70年には滅亡してしまいますから。この農夫どもを亡ぼし、この葡萄園を他の者に与える。天国を他のものに与える。異邦人に福音は伝えられる。イスラエルはダメだと。

イスラエルの国はまた今、国としては起きてきたけれども、あいかわらず、キリストは受けとらない。あいかわらず、イエスはキリストとして信じられない。

「その時が満つるまで」

とパウロがローマ書12章で言っている。

「ユダヤ人が本当の悔改めに来るまで、それまでは、福音はむしろ異邦人に伝わる」

と。パウロはその使徒として遣わされたわけです。

●隅の首石

10汝ら聖書に「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる。11これ主

によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり」とある句をすら読まぬか』
12ここに彼等イエスを執えんと思いたれど、群衆を恐れたり、この譬の己らを指して言い給えるを悟りしに因る。遂にイエスを離れて去り往けり。

と。そして、あいかわらず、イエスをいつか捕まえようと狙うわけです。

「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる。11これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり」

と。いわゆる伝統的な正統派というものが実は、神に背き、キリストに背き、聖霊に背く。これは宗教の歴史で――仏教の世界でも大体言えましょうね――この福音の世界で正にその通りです。もちろん、正統派の流れの中にも本ものもいますよ。けれども、とかく、これが本ものを迫害する。

預言者たちがそうであったし、キリストがその最たるものとして十字架に架けられた。使徒たちがやはり、キリストの後を追って、殉教の死をとげた。いろいろな改革者たちがみな、そういった苦杯をなめさせられて、この神の国の歴史は続いているわけです。

少し当てはめて言えば、「葡萄園の主」はもちろん神で、「葡萄畑」は神の国であり、また「酒槽」は祭壇のこととなりましょうし、「櫓」（望楼）はエルサレムの神殿のことにも考えられましょうし、「農夫ども」というのはそういったパリサイ的なユダヤ人と、そういったように自然に私たちがこれを読むことができるわけです。

ヘブル書13章をちょっと開いてください。

「8イエス・キリストは昨日も今日も永遠までも変り給うことなし。

「イエス・キリストは昨日も今日も永遠に同一者である」

というようなギリシャ語の言い方です。

9各様の異なる教のために惑わさるな。飲食によらず、恩恵によりて心を堅うするは善し、飲食によりて歩みたる者は益を得ざりき。10我らに祭壇あり、幕屋に事うる者は之より食する権を有たず。

これはこういうことなんです。我らにはキリストという、キリストの祭壇がある。旧約的な「幕屋に仕える者」は――即ち祭司です――これより食する権をもたずと。自分たちは新約の使徒であり祭司であるという角度から、これを言っているわけです。

11大祭司、罪のために活物の血を携えて至聖所に入り、

この旧約のね、

その活物の体は

それは小羊です。

陣営の外にて焼かるるなり。12この故にイエスも己が血をもて民を潔めんがために門の外にて苦難を受け給えり。

十字架の刑罰のことです。

13されば我らは彼の恥を負い、陣営より出ててその御許に往くべし。」（ヘブル13・8～13）

この旧約的な陣営、祭司・教法師たちの陣営から出てそのキリストの御許に往くべしと。

「外に棄てられる」

とありましたが、私たちは正に――私は33号（「曠野の愛」誌）で

「陣営よりいでて」

と書きました――無教会の陣営から私は出た。陣営から出て、そして、私は原始の使徒たちの信仰、また本当の神の国、本当のエクレシアの民たらんと欲している者です。

「自分がそうである」

なんて自分で言いません。かく欲して歩いている者、また、それでなければいられない者です。

●棄石

イエス・キリストがそのようにして棄てられた。棄てられた者が実は、本当の神の国の中心である。だから、

「造家者（いえつくり）らの棄てたる石は、これぞ隅（すみ）の首石（おやいし）となった」

と。「これはもう要らん」と言って、棄石です。棄石が実は本当の「隅の首石」である。

これは旧約聖書の詩篇118篇に出てくる言葉です。

「21われ汝に感謝せん。なんじ我にこたえてわが救となりたまえばなり。22工師（いえつくり）のすてたる石はすみの首石（おやいし）となれり。23これエホバの成（なし）たまえる事にしてわれらの目にあやしとする所なり。」（詩篇118・21～23）

神さまのなさるところです。私たちの生涯は、この棄石的なものです。

隅の首石は、ところが、棄てられたものは、なにも復讐しようとかいうものではない。棄てられたものは逆に隅の首石となって、みんなその上に建設されていく。

「俺たちは」

なんて思っているやつは、どっこい、その下にはちゃんと隅の首石がなければ、建たない。これが神の国において最も光を放つところのものです。黙示録に書いてあるように、最も貴き宝石となる。地上では隅の棄石、隅の首石。棄石である。しかし、天上の神の国におきましては、最後の「羔の婚姻」のあとの世界におきましては、これは本当に最も素晴らしく輝くところの宝石的存在となる。

皆さんの中に、それだけの光が、宝石が宿っている。棄石と思ったところが、これは宝石なんです。いいですか。この地上では、棄石的な存在としてある。でも、棄てられても、決して自己卑下なんかしませんよ。そんなケチなものではない。キリストは、いくら自分が棄てられると言いましても、彼は驚くべき権威をもって自信をもっておられる。この石

が揺り動けば、上の方はみんなひっくり返ってしまう。そういう石です。自信は地震に通ずるけれども、地震の原動力くらいになるような凄い石ですよね。

棄石と私たちがなっていく。棄石こそ本当に神の国を建設するところの石垣である。本当の石垣となるわけです。私たちはイエス・キリストと共に、また、使徒たちと共に、いわゆるこのキリスト教界において、棄石的な存在として行きます。

けれども、権威をもっているから、絶対に妙な卑下はいたしません。平伏しの魂というものは、本当の謙遜と妙な卑下とは違いますよ。皆さんは堂々と、棄石的存在であることができる。それは本当に建設的なものであり、創造的なものです。

イエスはかくして、いわゆる正統派に棄てられて、異端視されている。パウロも、

「お前たちが言うとおり、私は異端の首かも知れないけれども、実は最も忠実に旧約聖書の世界を進展させていくものだ」

と、彼は自信をもって使徒行伝27章で語っている。そういった、棄石となるというのは、明らかな勝利の自信、担いの力をもって棄石となっていきます。

けれども、それに気がついて、

「ああ、これが本ものだ」

ということを思う人が時々あらわれてくる。Mさんという人が、私の『桑の樹によぢのぼる』（曠愛新書2号）を紹介しまして、

「著者は白熱的信仰に進み、一層強く伝道邁進、曠愛新書一に続き、本書を発行。全編に福音的生命が溢れ、一読魂の躍動を覚える内容。特に書名と同題名の第一篇（ルカ伝）は救主キリストに対する人間、ことに信者の実存的信仰的態度の如何にあるべきかの主要の大真理を解明しあり。真に生命の言、神の声というべく、万事を後回しにして必読し、かつこれを体得すべきと思われ、是非にと推奨する」

というようなことを、自分の雑誌に紹介している。私はこんなことを書かれたのは初めてだ。どう言ったっていいけれどもね。この人は無教会の中で、普通の無教会の人と十分交わりをしている人だけれども、忌憚なく、今の無教会のパリサイ性を認識しまして、そして、こないだ私の所に訪ねてきました。私の気持を非常に共感してくれている珍しい人です。内村鑑三記念講演会というのがまたそのうちに東京と大阪である。この人は舞子で自分でやるらしい。

私も――今度の日曜日、3月28日がちょうど内村先生の日になる――何を言うか知りませんけれども。皆さんと、少数の本当にこの聖霊の権威をもって立つ君たちと、私は内村先生――ただ内村先生を記念するなんていう意味ではなくて――内村先生を乗り越えて進むところの前進をしたいと思っております。

●躓きの石

なお、ローマ書9章をちょっと見てみましょう。この言葉はパウロもペテロも引用している。

「30**然らば何をか言わん、義を追求(おいもと)めざりし異邦人は義を得たり、即ち信仰による義なり。31イスラエルは義の律法を追求めたれど、その律法に到らざりき。32何の故か、かれらは信仰によらず、行為によりて追求めたる故なり。彼らは躓(つまず)く石に躓きたり。**

「躓く石」という言葉はイザヤ書の中にある言葉です。

33**録(しる)して『視よ、われ躓く石、礙(さまた)ぐる岩をシオンに置く、之に依頼(よりたの)む者は辱しめられじ』とあるが如し。**」（ローマ9・30～33）

これはイザヤ書28章16節に出ている言葉です。また、8章にも出てますが。『曠野の愛』の26号に

「言い逆らいの徴」

という題で出しましたが、あれもやはり「躓く石」のことです。躓きの石にして隅の首石なんです。この福音は、本当の福音は躓きの石なんです。

あるところまでは聞くんだよね、けれども、その先に行くと躓いてしまって、福音の世界に入ってこない。それは文化とは違うから。福音は文化とははっきり違う。けれども、この福音の世界に入ってこそ初めて、文化に花が咲く。

この土の中に花が隠されているわけではない。土は土です。土は土でありながら、その土から養分を受けとると、福音の養分を受けとると、花が咲く。花と土とはまるで違う。それで、土というものに躓くわけです。水の中の、花瓶の中の花では枯れてしまう。これは、水だと躓かない。けれども、土だと、何か汚らしいというようなわけで躓く。本当の福音は元来の人間には入れられない。どうしても、その前に降参するまでは、聖書の世界には入れない。だから、

「分かる、分からない」

の世界ではないと申し上げている。「分かる、分からない」ではない。イエス・キリストというものにとにかくぶつかって、

「もう、この人には参りました！」

と言って降参したら入れる。「イエスが分かる、分からない」ではない。この驚くべき現象体の前に、もう文句なしに、その前に全く参ってしまう。

「もう、どうにもなりません」

と。そしたら、イエス・キリストは、

「お前を本当に自由自在な人にしてやる」

と言う。これが福音なんです。

ところが、そういう神さまの本当の生命を、光を、真理をいただかないで、キリストを受けとらない者は、どんなに宗教的に偉そうであっても、道徳的に立派そうであっても、みんなこれは逆に躓いてしまう。本当の世界には入れない。これがみな自己義認です。

「そのようにして、今に、みんな私に躓いてしまう。お前たちも躓く。残念ながらそうだよ。しかしながら、私が向こう側に行ったら、今度はお前たちは本当に躓かない人になるよ」

というのが、キリストが使徒たちを見放しても、なお見放さないところのわけです。

「ペテロ、お前は今はけなげだけれども、必ず私を拒む。三回否(いな)む。しかし、今度は聖霊が来たら、私の言ったこと、したことがみんな読めてくる」

と。もうはっきりしている。聖書というものは、御霊が来なければ読めない。

そういう意味において、私たちはこのような葡萄園になったら大変だ。私たちは本当の葡萄園に、

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」

というキリストの連なりの世界に入ってはじめて、葡萄園の本当の葡萄となり、本当の葡萄園を展開し、枝葉を全世界に、地の極(はて)までも伸ばしていくような存在となっていくわけです。そこに神の栄光が現れるんですから、もう何とも言えないですね。

どうか、皆さん、何かのきっかけに、福音を伝えてください。この世界のいかに素晴らしいものであるかを。いつも、その祈りをもって。

「神さま、どうか、苦しんでいる者、行き詰まっている者、求めている者に遭わせてください。そして、これを伝えさせてください」

という祈り心をもって歩いてください。おしまい。